

---

# 空賊物語?

神無月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空賊物語？

### 【コード】

NO510BA

### 【作者名】

神無月

### 【あらすじ】

これは 若き空賊が、一人の麗しきヴィエラの美女と出逢う物語である。

## カム・アゲイン chapter 1

バルフレアは閉口して、椅子の背もたれにギシリと身体を乗せた。テーブルの上には、さっきからじろりとこちらを睨みつけているモーグリのノノが、土足で仁王立ちしていた。

「……………」  
俺が何度忠告してもききやしない。

この小さなモーグリ族のノノは、俺に文句を言うときは、決まってテーブルの上に土足で仁王立ちだ。

いつもは、かわいいクリクリした目尻が、キツと釣りあがっている。といつても、愛らしい容姿をした彼が怒ったところで、俺は別になんとも思わない。

むしろ、コロコロ変わるノノの表情がおもしろい。

まあ、そんなことは口が裂けても本人には言わないけど。

「なあ、そこ……………」

俺はだるそうに身体を背もたれにあずけたまま、テーブルの上を指した。

「食事したりする場所だろ？土足はいかがなものかと……………」

言い終わる前に、ダンツとノノの小さな足がテーブルの上で跳ねた。

「今はそんな話してるんじゃないクポーツ！」

「はいはいはいはい」

俺はピシリと姿勢を正して、椅子に座りなおした。

「これで何度目クポ！？バルフレアの所為で、シュトラールはガタガタクポ！」

「はい、すみません」

「無茶な操縦ばかりさせてたら、ホントにいつか、飛べなくなるクポ！それは何度も説明してるクポ」

「はい、わかってます」

「だいたい、あの飛空艇ふぶねを操縦するのは一人じゃ無理クポ。ちゃん

と、副操縦が必要だクポ。なんとも言ってるクポ？それなのに、一人でやるうとするから、大体無茶をする羽目になるクポ」

「はい、気をつけます。細心の注意をはらって……」

「違うクポ！」

俺の正していた姿勢が徐々に、ぐったりと崩れ始める。

「ボクが言いたいのは、もう一人、副操縦が出来るヒュムが必要だつて言ってるクポ」

「だーかーらー」

俺は、ついにまた椅子にぐだつと倒れこんで、頭を抑えた。

「それは、嫌だつていつてんだろ？」

空賊家業をするようになり、数年。

気付けば、いつの間にか、俺には高額な賞金がこの首にかかっているようで、それを狙う賞金稼ぎが後を絶たない。

まあ、ある程度、力のある空賊にとってそれは避けられないことではあるが、

急激に俺の首が高額になったのには、帝国からの圧力がかかっていると考えて、まあ間違いなさそうだった。

高額賞金首の空賊が、元ジャッジだったとしたら……。

その首を捉えた賞金稼ぎはさぞかし愉快だろう。

始めた頃の気楽な空賊業とは異なり、ここ数年はずっと執拗に賞金稼ぎにも狙われるようになって、

俺もずいぶんと気ぜわしい。

いつもは、賞金稼ぎに見つかるとさっさと逃げるのだが、

今日現れた賞金稼ぎは、ここ最近頻繁に現れるようになったバンガ族の男だった。

名前をなんていったっけ？

そうそう、バツガモナン。

結構、やたらしつこくて、やたらやかましくて、あまりいい噂を聞

かない。

まあ、賞金稼ぎなんてもともとそういうもんだけど、そのバンガはちょっと異常だった。

しつこい癖に、どことなくそのやり方が馬鹿っぽい。

ちょっと退屈していた俺は、からかってやれ、とシヨとラールを急旋回させて、バッガモナンのトロそうな飛空艇を掠めてやった。

捕まえられるもんならやってみる。

俺は舌をだして、不意をつかれて慌てふためく人相の悪いバンガを笑った。

しかし、そのバンガもただの賞金稼ぎではなかったらしく

さらに、シュトラーを旋回させ前方を見て、唾然とした。

わらわらと、仲間だと思われる賞金稼ぎの飛空艇がいきなり姿を現していた。

どうやら、あのバンガは、俺を捕まえる為にその少ない脳で作戦を立ててきたらしかった

「しつこいバンガがいるって言ったろ？それに捕まったんだって…

…振り切るときにちょっと…ね」

「バッガモナンのことクポ？そんなの今に始まったことじゃないし、バッガモナンの飛空艇になんてあのシュトラーが負けるはずないクポ」

「だって、マジでしつこかったんだって……仲間の飛空艇が隠れててさ、わらわら出てきて一斉攻撃だぜ？」

「どうせ、調子に乗って、挑発したんだクポ？どうして、もっと大人しくできないクポ？」

「たまにはさあ、ちょっと憂さ晴らしっていうか……魔がさしたっていうか……」

「それ、女と同じクポ？」

「は？」

「だいたい、バルフレアはいつもだらしないクポ。」

ノノの怒りは今回もそうとうしつこい。

だいたい、シュトラールが故障すると、ノノは激怒する。

ただ、今日は日頃のストレスがよっぽど溜まっているのか、今回の件とは関係のないことまで引き出してぐちぐち言い出した。

俺は、ぐったりとしたまま、ノノの怒りを受け続けていた。

ノノは、俺の飛空艇シュトラールの専属機工士だ。

そして、世界最速の飛空艇を造る事を日々目指している研究熱心なモーグリだ。

元々はレベッカの元で専属機工士主任をやっていたが、俺と出逢って以来行動を共にしている。

「……とにかく、シュトラールには、もう一人副操縦士が必要クポ」  
なんとか、話を軌道修正し、今日、何度も言っている台詞をノノはもう一度俺に言った。

「とにかく、それは断る！」

俺は、話にならないというように手を煩そうに振った。

「ダメクポ」

「ちよつとまでよ、冷静になろうぜ？なあ、第一、副操縦士を仲間に入れるってことは、稼ぎの取り分も減るってことだぜ？ノノ、お前の夢は最速の飛空艇を造ることだろ？このシュトラールよりも。多額のギルが必要になるだろ？それなのに、取り分減らしてまでもう一人雇うなんて馬鹿げてると思わないか？」

「シュトラールが動かなくなったら、それこそ、もともこうもないクポ！！」

「だから気をつけるって」

「ダメクポ！副操縦士を入れるクポ」

あーあ、また堂々巡りだ。

俺は、フーと溜息をついて、椅子から立ち上がった。

「どこいくクポ？」

「もう、いい時間なんだ、寝ろ」

「まだ話は終わってないクポ！」

「腹が減ったんだよ！飯食ってくる」

「バルフレア！！」

ノノの怒鳴り声を聞きながら、俺は扉を閉めた。

外に出ると、青い空にぼっかりと銀色の月が浮かんでいた。

他のヒュムと一緒に仕事なんてしたくない。

そういうのは煩わしい。

もう、俺はジャツジではない。

帝国の人間でもない。

地位も名も家族も、なにもかも捨てた。

俺はどこにも属さない自由なんだ……。

いまさら、どんなしがらみも欲しくない。

俺は最近イラついていた。

アルケイディア帝国が、侵略戦争を周辺諸国にふっかけ、強大な軍

事力で侵攻を繰り返している。

力のない小国は支配下にされていく……。

そんな話を聞かされた時に、俺の中で消し去ったつもりの、忘れたくて

仕方がない記憶を突かれるようでイライラしていた。

イラついていたから、だから、あの賞金稼ぎを挑発したりした。

最愛のシュトラールで、思い切り飛ぶことはなにより心が安らぐ。

すべてを忘れられる。

もっと速く、もっと速く、もっと高く、高く。

もっと自由に、飛びたい。

空を支配しているような気分。それだけが、俺の……。

「副操縦士？……冗談じゃない」

俺は月明かりに照らされた白い道を、繁華街へ向けて歩き始めた。

## カム・アゲイン chapter 2

シュトラール修繕の為足止めを食らったこの街に滞在するようになって、数日が過ぎていた。

ブーブー文句を言っていたノノも、俺がまともに相手にしないものだから、諦めたのかあれ以来、何も言ってきていなかった。

だから、俺はすっかり、そのことは忘れていた。

その日も、酒場でいつものように酒を飲んでいたら、世の中が戦乱に向かって騒ぎ立てていても、変わらないものは変わらない。

賊と分類される連中はもともと世の中のおぶれ者で、その生活態が日々戦争みたいなものだ。

つまり、世間が何をしようが、どうなるうが、俺達には関係がないってわけだ。

むしろ、勝手にやってくれてくれたことだ。

俺は最近頻繁に通うようになった酒場で知り合った女と親密な関係になりたくて、いつものように、酒を飲みつつ女を口説いていた。

シュトラールと酒と女。

これだけ揃えば何も言うことなんてない。

そろそろホテルにでも行こうか？なんて酒場を出ようとしたまさにその時、

聞き慣れた、むしろ聞き飽きた少し甲高い声が、店内の喧騒の中、聞こえた。

「バルフレア！」

俺は気付かないフリをして、傍らの女の腰に手を廻した。

女はちよつと恥ずかしそうに身を振る。

その仕草が、余計そそられる。

「バルフレア！」

息がかかる程顔を近づけて、でもお互いの顔がよく見える距離で、

相手が喜びそうな言葉を囁く。

女は魅惑的な上気した笑顔で、俺を見上げる。

よし、これからが本番。

「バルフレア!!」

だんだん近づいてくるその甲高い声の持ち主は、足元までくると俺のズボンをぺしぺし叩いた。

「なんなんだよ!!」

俺は舌打しながら、振り返るとノノが、上気した顔で俺を見上げていた。

「きゃーかわいい」

ノノに気付いた女の子達が騒ぎ始める。

これからって時に、コイツは……。

俺は、女の腰に廻っていた腕を解くと、「ちよっと待ってて?」と彼女に極上の笑顔で謝ってから、

片手で、ノノを吊るし上げるようにして持ち上げた。

「何しにきた!?!」

声押し殺して、それでも十分迷惑だと伝わるように、ノノを睨みつけた。

「バルフレア!大変クポ!」

ノノは、そんな俺のことなんて、全然気にならないようで、クリクリした目をキラキラさせて言った。

「すっごい美人クポ!」

「は!?!」

「すっごい美人を連れてきたクポ!」

「な……なにを……い」

「すっごい美人!女好きのバルフレアもきつと気に入るクポ」!  
「……!」

俺は慌ててちらりと、今夜、せつかく苦労して口説き落とした女を振り返って見た。

女の顔は明らかに不審げなものに変わっていた。

「おまえね……」

俺は、掴んでいたノノの首筋に力を込める。

「だって、バルフレアの女好きは本当のことクポ？それに美人クポよ？」

もう、俺は完全に後ろを振り返る気力を失った。

「おまけに、ヒュムじゃないクポよ？」

「いったい何の話……」

「副操縦士の話だクポ」

「副……？」

俺は、すっかり忘れていた単語が飛び込んできて、酔いまで吹っ飛びそうだった。

「まだ、そんなこと……」

「あれから、ずっと探してたクポよ！それで、やっと見つけたクポ！これほどの条件はないクポ」

「どんな好条件だろうと、誰だろうと、副操縦士なんて雇うつもりはないって言ったろ？」

「美人クポ」

「美人、美人、ってお前ね……。ノノの好みがどうだか知らないけどね、俺、一応女には苦労してないんだけど？」

「でも、振られたクポ？」

ノノが俺の背後をちらりと視線を向けて、にやりっと笑った。

こいつ……絶対わざとだな？

「……お前、よっぽど俺に恨みがあるようだな？」

「当たり前クポ。ボクの大事なシュトラールを乱暴に扱うなんて許せるわけないクポ」

「この飛空艇マニアめ、それに、シュトラールは俺のだ」

「メンテナンスも碌にできもしないくせにエラーソーに言うなクポ。ボクがいなきゃ、とつくにオシャカになってるクポ」

「なんだと……」

「とにかく、もうこれで安心クポ。」

優秀な副操縦士が見つかったクポ。

それに、彼女が飛空艇を失ったのは、バルフレアの所為だし、無下に断れないクポよ？」

「何を言っているのか、さっぱりワカリマセン」

「とにかく、一度会ってみるクポ！彼女もシュトラールのこと、とっても気にいってくれたクポ」

「何勝手に話進めてんだよ？」

調子に乗ってんじゃ……」

「ノノ？」

その時、店の扉が開いて、ハスキーな低めな声がノノの名前を呼んだ。

確かに、ノノの言っていることは正しかった。

そこには、店内が一瞬しんと静まり返る程、美しいヴェイエラ族の女が立っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0510ba/>

---

空賊物語？

2012年1月1日23時45分発行